



—映画「カミュなんて知らない」の撮影には学生が参加したと伺いました。

夏休みに立教大学で行うことになっていた、この映画の撮影に参加しないかと声を掛けました。学生たちはボランティアでの参加でしたが、プロの俳優やスタッフを呼んで撮影するなんて、大学4年間の中ではとても経験できない。この機会を逃す手はないぞと持ちかけたら、わーっと来ました。早稲田の授業では、まず学生たちのクランクインとクランクアップを決めて〔その間に撮影しないとまずい。そうなるとその前に準備をしないとけない。何々君はこれ、何々君はこれをやる〕と振り分けて責任を与えた。最初はだらだらやっているんだけど、だれかが約束したものをやらないと周りが迷惑するし、先に進まなくなるんです。それが体験的に続いていくと、もうクランクイン数週間前は学生たちの目の色が変わりますよ。いまの学生は駄目に見えるようで、ちゃんと責任を持たせれば、自分の行動が周りにも影響するってことがわかるんです。

—高校時代、数学は好きでしたか。

数学は嫌いとも好きと言うこともなかったですね。私立文系の受験では数学は必要なかったし、数学のおもしろさが自分にはわからなかった。でも数学をマスターすることによって、明晰さとか別な意味での論理の持ち方はできたかもしれない。

—早稲田大学の文学部で教えられたそうですね。

2001年から3年間。映像ワークショップという授業で、基本的には映画を学生たちがつくるのを指導してほしいという要望でした。僕は毎年夏休みまでは「溝口健二」を教室で教えて、夏休みに宿題として学生たちにシナリオを書かせた。秋にはその中から1本選んで、学生たち25人を監督、助監督、撮影、美術、制作などに分けてみんな映画をつくっていき、それを僕が指導するというスタイルをとったんです。

溝口健二の授業では映画に映っているもの、人物、カメラの動きなどを全部書かせました。例えば、登場人物のクローズアップ、ロングショット、ミドルショット。このカットで人物が左に来るように右にフレームをとる。そういうカメラワークも全部克明にノートに書かせたんです。

—数学では書かせることが少なくなりました。

これは僕の持論ですけど、書かなければ人間だめなんです。書かせる習慣。書くことが必要で、頭で思ったものは消えていく。書きながら考えるんですよ、人間は。

立教での撮影の時も同じでした。彼らは黙々とやるんですよ。僕らより肉体的に優っているから、重い物を運んだり、徹夜だってできる。我々とははるかに体力が違うから、すごく役に立った。

—高校の先生に言いたいことは。

僕が3年間、早稲田の学生たちと出会って感じたことは、かれらは優れたいい人生の先輩たちと出会ってなかったなということ。人間関係で揉まれながら、その中で「自分とは何か」みたいなことを感じてきた形跡が感じられない。

先生も親も大人たちは、おっかなびっくり子どもたちに接しているんじゃないかな。学生たちは一人一人自我が違うわけですよ。そういうことを人生の先輩として認識しているのかと。

先生は専門分野だけを教えていればいいということではない。キャリアを踏んで子どもたちに接しているわけですよ。そのキャリアのよさ、人生や人間、社会について、先輩である大人世代はちゃんと教えてほしいと思いますね。

<「カミュなんて知らない」DVD発売中(株)エスピーオー>